

街的店録

まちてきみせろく

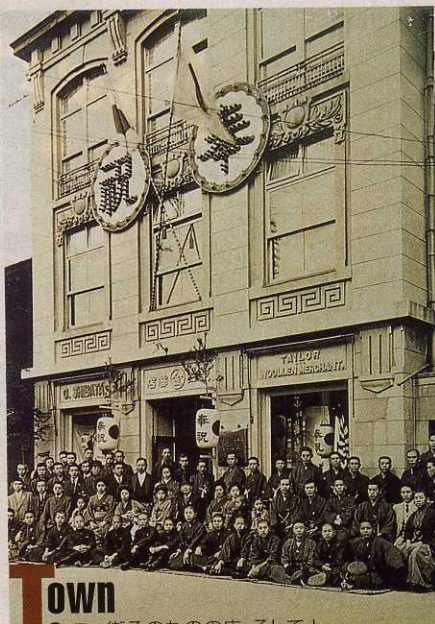
29

神戸市中央区元町通4丁目

柴田音吉洋服店

取材・文/奥 茉莉子 写真/米原敬太郎

「変えないでいる」店の個性が、その街でしかない「らしさ」をつくりだす、と老舗洋服店で知る。



街そのものの店、そして人。



Town & Shop

文明開化からほどなく明治16年、洋服を扱う日本で初めてのテーラー、柴田音吉洋服店が神戸で生まれました。元々、柴田家の本家は近江から神戸へ出てきてマッチ商をやっていたのですが、分家である初代の音吉は、「これからは洋服の時代だ」と直感し、神戸に住んでいた英国人のカベルさんという方の下でテーラーの修業をしたのが始まりです。当初は外国のお客様が多かったように思われがちですが、日本人のお客様が中心でした。やはり神戸に暮らす人たちは、昔から流行に敏感だったのではないのでしょうか。初代音吉

ファミリア、神戸風月堂...と誰もが一度は名前を聞いたことがあるような全国区展開の店の本店が、神戸の元町通商店街に多くある。貿易港のお膝元として賑わったこの商店街は、明治期には正装して行くようなハイカラショッピングエリアだったそうだ。その商店街に、創業当時からオーダーメイドテーラーとして変わらずに営業を続けてきた洋服店がある。それが「柴田音吉洋服店」だ。現在の店主、四代目柴田音吉氏が先代、先々代から聞き伝えられた話をしてくれた。

これまでの「神戸ブランド」イメージに支えられたこの元町通商店街も、最近では通りを歩いていると少し寂しい気分になる。しかし、ハイカラな商店街のイメージを先導してきたのは何も

は名人肌で逸話も多く、体に触れる探寸が許されなかった明治天皇のお召服を、ただ目測するだけで立派に仕立てあげた、というエピソードも残っています。二代目は政府の留学生第1号としてフランスのリヨンへ毛織物の勉強へ行きました。三代目は戦後の焼け残りから独自の経営力で会社を再建しました。そして私が、祖父から「四代目音吉」の名前を襲名し今に至ります。

うちのスーツジャケットの内側には店のラベル(ネームタグ)が付いていないでしょう。日本で初めてスーツを作ったので他店と区別する為にラベルを付ける必要がなかったのです。ネクタイなどの洋装品店もほとんど神戸が始まりです。日本におけるファッションの原点が神戸の街にあります。しかしながら、歴史を振り返ってみると「ファッションの先端を行く街だ」というイメージに支えられてきた部分が、かなりあるようにも思います。

a. b. 欧州ではテーラーのことをファッションドクターともいうが、単に服装の話ではなくトータルにアドバイスするからだ。それを創業当時からの時代まで、こんなにきっちり継承される店もない。c. スーツを作成する度に使用した生地片を貼り付けて作られる顧客のカルテと、同じく保管する4,000枚の型紙は、「95年の震災の際も、幸いしてこれが無事に残っていたからこそ再建できた」と、言うとおりのものでもないこの店の証だ。d. まさに「Be Spoken (話を受けて)」なスタイルを受け継ぐ、四代目音吉氏。「五代目には...続くんですかねえ」と笑っていた。

約130年の歴史がある元町通商店街も、この20年間に4~5割の店が、業態も表情も変えている。その中であって、明治16年の創業以来、戦中戦後、そして震災...と時代の波に直面してきたこの店の、「不思議と店を畳むまでの大事には至らなかった」という言葉は重い。そして、昔と変わらない場所と手法で今もスーツを作り続けている。●神戸市中央区元町通4-2-22 ☎078-341-1161 11:00AM~6:00PM 日・祝休

のでもなく、柴田音吉洋服店を始め、この街で技術と信頼感を保ち続けた一軒、一軒の店だ。こうした店々の個性、それを「変えないでいる」ということが、どれほど街の強みとなることだろう。父の世代が通った店の扉の向こうでは、今の私や、次の世代までも同じ笑顔が迎えてくれる、そんなささやかな日常の「コマ」こそが、きつとうれし。